

# 「～んですね」についての覚え書き —形式的記述からその談話機能を探る—

橋本直幸

## 1. はじめに

日本語の話しことばを特徴付ける要素の一つに終助詞がある。近年、日本語教育や第二言語習得研究においてもその重要性が指摘され、「ね」や「よ」を中心として、誤用分析や習得研究、指導法などについて考察した論稿も多く発表されている。

日本語教育の現場において、終助詞「ね」が必要になるのは、「話し手も聞き手も知っている内容を述べる時」および「聞き手の属性など聞き手に関する内容を述べる時」（庵ほか2001）と説明されることが多く、「よ」と比較されることも多い。しかし一方で、次にあげる(1)のように聞き手の知らない情報についても「ね」が付加される場合があることを指摘し、「ね」を聞き手と切り離れた認識面から記述した研究も見られる。

(1) A : いま何時ですか？

B : ええと、7時ですね。(金水1993)

また、次の(2)も同様に、聞き手の知らない情報に「ね」が付加した例である。

(2) 私はね、文学座に入って、みんなが煙草吸ってたんで、それであわてて、訓練して吸えるようにしたんですね。セブン・スターで。忘れない。で、お酒は、やっぱり初めて映画に出た時に、なんかもう、みんなにギャーギャー言われて。  
(三谷幸喜『気まづい二人』)

(2)のように「のだ」の後に「ね」が付加された「～んですね」は、「～ですよ」に置き換えることが可能で、その意味も極めて近い。先行研究ではこの両者の違いについて「聞き手との一体化」「情報の共有化」といった用語で説明されているが、本稿では、実例をもとに、より形式的な面からこの「～んですね」の特徴を記述、説明することを試みる。とくに実際の談話において、どのような機能を果たしているかといった談話機能に注目しながら記述する。

また、この「～んですね」は、「のだ」「ね」といった日本語学習者にとって習得しにくい項目が含まれており、上級以上の学習者でもなかなか自然に使用することができない。

本稿では母語話者の実例をもとに、形式的な面からこの「～んですね」の特徴について考察した後、日本語学習者の実際の使用例も交えながら、日本語教育にも応用可能なかたちでの記述を試みる。

## 2 先行研究の問題点と本稿における記述の立場

### 2.1 「んですよ」との比較

本稿で考察対象とする「～んですね」に関しては、「ね」「よ」のコミュニケーション機能を考察した伊豆原（1993）の記述がある。伊豆原（1993）では、「ね」の中心的機能を「聞き手に話し手と同じ気持ち・情報を共有させようとする話し手の働きかけ」とであるととらえている。そして、本稿で対象とする「～んですね」については、「悩みごとの相談」や「レポーターの現地報告」で使用された例をもとに、「話し手は単に情報を伝えるのではなく、聞き手との間に気持ちの一体化・共有化を求めようとしていたり、話し手が聞き手の気持ちを汲みながら聞き手の気持ちに沿って話を進めようとしている（p. 109）」と説明している。一方、「～んですよ」との差異に関して、「よ」は聞き手に情報を持ちかけることにとどまり、共有化を図る機能はないとし、その結果、この持ちかけが時として押し付けがましさを伴うと指摘している。

しかし、「気持ちの一体化・共有化」「情報のもちかけ」といった抽象的な用語での説明は反証可能なかたちでの記述とは言えない。「共有化の機能を持たない「よ」による持ちかけが押し付けがましさを生む」といった記述も妥当なもののように思われるが、一方で、「ね」のように、聞き手に共有化・一体化を求めることのほうが、押し付けがましさを生むのではないか、といった疑問も生じてくる。

本稿では、この「～んですね」の記述の方法として、形式面での記述を重視し、より明示的な形で「～んですよ」との違いを記述したいと思う。

### 2.2 複合形式としての扱い

本稿は、表題に示したように、「～んですね」の機能についての考察である。つまり、「～んです（のだ）」＋「ね」ではなく、「～んですね」を一つの表現形式として認める立場から考察を進める。

本稿で対象とする「～んですね」を複合形式として扱うことの是非に関して、松木（1993）でも同様の観点から分析がなされている。「の」と終助詞の複合形の意味・機能を考察し、これらの表現がいわゆる「複合辞」にあたるかどうかを問題として考察

を進めている。その結果、「の」と終助詞の複合形の意味・機能の大部分は、基本的には構成要素の合計、つまり「結合」で処理できそうである。(p. 62)」と述べている。ただし、中でも一部、複合辞化したものがあることを認めており、本稿で対象としている「んですね (のね)」もここに含まれている。

本稿でも同様に「んですね」をひとかたまりの表現として考察をすすめる。ただし、この「んですね」が、「だろうね」のような複合形式とまったく同じレベルの複合形式と考えることはできない。「んです (のだ)」、および終助詞「ね」のそれぞれの機能は保持したままであろうと考えられる。しかし、結論を先取りして言えば、「んですね」は、後に接続詞「で」「それで」「だから」が来る場合が圧倒的に多い。一方、「～んです。」「～んですよ。」および「のだ」を伴わない「～ね。」の場合、この傾向はあまり際立っておらず、「～んですね」に顕著な傾向であると言える。本稿は、「のだ」の本質、「ね」の本質を捉えようとするものではなく、日本語教育のための産出、運用のための記述を目標としている。そのためにも、「のだ」と「ね」が結びついた「～んですね」という形式が、どのようなテキストで使用され、どのような表現効果をもたらすか、実際の談話をもとに検討することは必要であろうと思われる。以上の理由から、「～んですね」を一つのまとまった形式として、論を進めることとする。

### 3. 考察の対象

まず、本稿で考察の対象とする範囲について規定しておく。本稿では最初に挙げた(2)や次に挙げる(3)のような「～んですね」について考察を行う。

(3) A: パン屋さんを選んだ理由ってというのは、なんか、やっぱり、パンが好きとか、あの匂いがいいとかそなんですか？

B: あー、まあ、パンが好きっていうのもありますけれどもー、まあ、たまたまー、私寮にいたんですけれども、寮で、その先輩がしてたんですね。で、あとがまというか、で、話がかかった、あったので。

(母語話者コーパス)<sup>1</sup>

これらの「～んですね」文で話される情報は、話し手だけが持つ情報であり、聞き手が知らない話し手側の情報を伝えるといった場面で使用される。先に述べたように

---

<sup>1</sup> 「母語話者コーパス」は、平成7年度文部省科学研究費補助重点領域研究「人文科学とコンピュータ」(研究代表者: 上村隆一) で作成された日本語母語話者の会話資料コーパスのこと。インタビューの形式は、非母語話者の会話能力テストである OPI (Oral Proficiency Interview) を採用している。

「～んですよ」との置き換えが可能である。従って、次に挙げる (4) (5) のような確認要求、同意要求の「～ですね」は考察の対象とはしない。

(4) A : 午後は毎日アルバイトなんですよ。

B : じゃあ、明日の夜のパーティーも欠席ということではないんですね。

A : はい、仕方ありません。 (作例)

(5) A : 家から大学まで1時間半かかるんですよ。

B : 結構かかるんですね

A : ええ (作例)

また、音調面の特徴としては、上昇イントネーションを伴って発話され、確認要求の「～ですね」と同じイントネーションとなる<sup>2</sup>

なお、普通体の会話の場合、「～のね」となり、「～ですね」と基本的に違いはないと思われるが、多少の問題も残しており、本稿では「～ですね」のみを扱い「～のね」については稿を改めて検討したい<sup>3</sup>。

## 4. 考察

### 4.1 談話内での「～ですね」文の傾向

「～ですね」文の最も顕著な特徴は、直後に「で」「それで」「だから」のような接続詞を伴った文が続く場合が多いということである。次ページ表1は、同一ターン中で使用された「～ですね」のうち、後続文との関係を明らかにするために、明示されている接続詞の数を示したものである。対象とした資料は日本語母語話者のインタビューおよび対談番組の文字化資料である<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> 森山 (2001) では、「ね」のイントネーションからその機能について考察しており、明示的イントネーションで発せられる「ね」は、通常、確認要求として聞き手に解釈されるとしている。そして、本稿で扱う「～ですね」も同様に上昇イントネーションで発せられることを指摘したうえで、「内容的な確認要求をしているわけではないが、それでもやはり伝達現場で聞き手の反応を確かめつつ会話を続けるという機能で使われている (p.44)」としている。

<sup>3</sup> 置き換え可能な「～ですよ」の普通体には「～んだよ」「～のよ」があるのに対し、ここで扱う「～ですね」の普通体には「～んだね」が存在しない。(ただし、確認要求、同意要求の場合の「～ですね」には、「～んだね」「～のね」が存在する。) なぜ、「～んだね」が存在しないかについては現時点では説明することができない。また、「～のね」がやや女性的であるといった指摘や、比較的新しい用法ではないか、といった指摘もあった。

<sup>4</sup> 日本語母語話者のインタビューは、注1に挙げた母語話者コーパス、また対談番組は次に挙げる番組内での対談コーナーからのものである。TBS系列『はなまるマーケット』対談25分～30分×5

表1 「～んですね」文と後続文との関係

後続文の接続詞	用例数
で	42
だから、ですから	21
それで	14
例えば	3
そうすると	3
しかも	2
確かに	1
むしろ	1
でなくて	1
ただ	1
そうしましたら	1
っていうのは	1
接続詞なし	37
計	128

表1を見ると、「～んですね。で、～」「～んですね。それで～」、「～んですね。だから～」のように、「で」「それで」「だから」で文が続く場合が圧倒的に多いことがわかる。一般に「順接型」として分類されるものである。(市川1978)。それに対し、「しかし」や「けれど」のような「逆接型」は1例も見られなかった。

順接型のうち、最も使用の多かった「で」は、「それで」と同様に扱われることが多かったが、浜田(1995)によると、「それで」の多様な用法のうち、〈添加〉の場合に限り、「それで」が「で」になるとされている。「だから、ですから」は〈因果関係〉を表す。「それで」の機能は研

究者によって様々挙げられているが、ここでは、共通してみられる〈因果関係〉および〈添加〉としておく。以下、「で」「だから、ですから」「それで」について代表的な例文を挙げる。

#### 〈添加〉を表す「で」による連接

(6) A:何か仕事をしてらっしゃいますか

B:夫が、(A:はい) ええ、あの、会社員なんですけれども、アメリカの方に、海外赴任ということで、えー、晴天の霹靂みたいに決まったんですね。で、その時に、どうしようかなーと思ったんですけれども、まああのー、自分の、心も、体も頭の方も、少し、充電をする、う、期間、いい機会だと思ひまして、それで、あのー、学校、勤めを辞めまして、あのー、ついていくことに致しまして (母語話者コーパス)

#### 〈因果関係〉を表す「だから、ですから」による連接

(7) A:ずっと、その外国人に言葉を教えるっていう、ことですかそれともなかほかのこともなさってらっしゃる。

B:ええ、あの言葉を教えるっていうことは結局日本の文化を教える、ある

いは毎日の生活で、困ったこと、あたくしがアメリカ行った時もそうでしたけれど、ほんつとに、日常生活で分からないことが、例えば、ゴミの出し方一つ、からして、何曜日か、そしてどのように出したらいいか分からなかったんですね、始めのうちは、ですから、あたくしが困ったことをそのまま、や、ってあげているっていうか、そういう、言葉そのものよりも、生活一の、応援という、感じですね。

(母語話者コーパス)

〈添加〉を表す「それで」による接続

- (8) 私あの一、出身が神戸で、先日地震があつて、あの一、家族もみんな無事だったんですけど、私のうちから、北に向かって10軒ぐらいのうちに全部壊れて、今更地なんですね。それで私のうちから南が、あの一、櫛の歯を抜いたように、残ってたり残っていなかったりで、あの、ほんとうに、九死に一生を得たような。

(母語話者コーパス)

〈因果関係〉を表す「それで」による接続

- (9) (約束をキャンセルするというロールプレイ、留守電にメッセージ)

A: ただいま留守にしておりますので、発信音のあとにメッセージをお残しください。

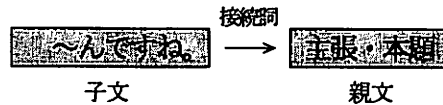
B: あ、あの一、小沢です。すみません。あの一、あすの約束なんです、実は急に、あの一、とても大切な用事が入ってしましまして、行けなくなっちゃったんですね。それであの一、出来たら時間と場所を変えていただいて、あの一、お会いしたいと思うんですけども、今いらっしやらないようですので、取り合えずあした行けないということとだけ、あの一お伝えして、またのちほど、お電話おかけします。

(母語話者コーパス)

野田尚史 (2002) では、テキスト中の文と文の関係を分析し、他の文に従属している文を「子文」、他の文に従属していない文を「親文」と呼んでいる。野田 (2002) で例を挙げて中心的に説明している「親文」「子文」は、本稿で指摘するものより従属度が高いものであるが、「～んですね」文と後続文の関係も、従属度はさほど高くないものの、やはり子文と親文の関係にあると言える。つまり、〈因果関係〉や〈添加〉の連文では、「～んですね」文が原因・理由を表す「子文」として機能し、後続文が結果を

表す「親文」となるのである。

以上のことから、「～んですね」に後続する親文が話題の中心的な主張部分であり、「～んですね」文は、その原因・理由や、補足情報など「前提」を表す部分であると言える。



では、先に挙げた (6) から (9) の例文について、具体的に見ていこう。

(6) では、「何か仕事をしているか」というAの質問に対するBの回答の中心は「今は仕事を辞めて何もしていない」ということである。その前提情報として、「夫が会社員であること」「海外赴任が青天の霹靂のように急に決まったこと」を「～んですね」を用いて述べている。同じく (7) では、「外国人に言葉を教えているのか、それとも他のこともしているのか」というAの質問に対し、Bの「言葉そのものよりも生活全般を応援している」という部分をもっとも重要な部分であると考えられる。そのための前提として「自分がアメリカに行ったときにゴミの出し方が分からなかった」ということを「～んですね」文を用いて述べている。(8) では、「地震で10件ぐらいのうちが全部壊れた」「うちから南の部分が残ってたり残っていなかったり」というのが主張部分であり、「今、更地である」ということは補足情報であると考えられる。(9) では、「約束の時間と場所を変えてほしい」というのが主張部分であり、そのための前提(ここでは原因)として「急に大切な用事が入ってしまった」ということを「～んですね」文によって述べている。

以上のように、「～んですね」はあくまで子文であり、後ろに親文、つまり主張部分が存在するのである。

なお、表1を見ると、接続詞を伴わない文が37例存在する。(10)(11)のような文である。

(10) A : (前略) 他の時は、どんな風にお過ごしでしょうか。

B : 他の時は、他には、特には仕事をしてないんですね。あの、単発で入ってくる、あの、翻訳、英文和訳の仕事などがたまにありますけれども、仕事というとそれだけで、ま、あとは、空いてる日はテニスをしたり。  
(母語話者コーパス)

(11) 今、実は隣に同じような人がいて、ちっちゃな女の子が朝早くからピアノ

を練習しててね、で、英語で文句を言うのは全然差し支えないんですね。  
英語なら文句は言いに行けるんですけども、日本語で文句を言うのはち  
よっと苦手ですね。 (母語話者コーパス)

(10) (11) も基本的に前提、補足情報と言うことができよう。ただ、「で」や「そ  
れで」などを使用していない。先に挙げた (6) は明らかに時間的展開がある文脈で  
あるのに対し、(10) (11) は時間的展開がない文脈で、話の流れはそこで中断してい  
るようにも感じられる。今後、談話展開の機能と親文・子文といった概念の両方を視  
野に入れ、検討したい。今後の課題とする。

それでは、置き換え可能な「～ですよ」との比較を通して「～ですね」文につ  
いて考えてみたい。「～ですよ」文は、「～ですね」文ほど従属的な関係にあるも  
のは多くなく、聞き手の質問に対する直接の答えや話題の中心的部分に用いられるこ  
とが多い。従って、後ろに主張となる文が続くことも少なく、ターンが変わることも  
多い。表2は、ターンの途中に現れた「～ですね」と「～ですよ」の数を示した  
ものである。対象とした資料は同じく、母語話者のインタビューデータとテレビの対  
談番組である。

表2 ターン中で「～ですね」「～ですよ」が現れる割合

～ですね	128 例 (64%)
～ですよ	72 例 (36%)

実際の用例からその割合を見てみると、ターン中では「～ですよ」よりも「～  
ですね」のほうが現れやすいことがわかる。つまり、「～ですね」はターンの途中に  
位置し、話者交替が起こりにくいことを示している。もちろん、「～ですね」  
がターン末に位置し、話者交替が起こっているものもある。対話における話者交替の  
要因は、その場の状況、話者同士の人間関係、話の内容など多くの要素が絡み合っ  
ており、単純に一つに決めることはできないが、「～ですね」に関しては表2のような  
傾向が言えそうである。

次の (12) は「～ですね」と「～ですよ」が同じターンの中で同時に使用され  
ている例である。

(12) A : 新入生が入って一気飲みさせたってということで、そういうのをどう思  
います？

B : どうなんでしょうねえー。僕自身、こう十代の頃から、喫煙、飲酒、そ  
の他、こうしてきたんですけども、あの、自分で思ったことは、僕一



年浪人したんですね。で予備校に行った瞬間からこう煙草もなんでもありになるんですよ。

A: うん。ああそうか。高校のときは駄目

(母語話者コーパス)

「～んですね」で表されている「一年浪人した」という部分は「自分が予備校に行っていた」ということの前提となる部分で、「予備校に行った瞬間から煙草もなんでもありになる」といった話題の中心となる部分は「～んですよ」で表されている。

従来の先行研究でも「のだ」が前提や補足情報、理由を表すといったことは指摘されている。阪田・倉持(1984)では、「のだ」の機能として次の2点を挙げている。

① ある結論を導き出すのに、その前提となる事柄を述べるのに用いる。

② ある事柄を前提として、それから必然的に導き出される結論を主張する

しかし、「前提」と「結論」といった相矛盾する概念を同時に提出していることには疑問が残る。「のだ」が「なんらかの関係付けを示す」ことから、前提ともなりうるし、結論ともなりうるわけであるが、機能・用法が多岐にわたる形式は、どのような環境のときに、どの機能が選択されるかを明らかにしていく必要がある。そして、日本語教育への還元を考えた場合、それはできるだけ意味的環境ではなく、共起成分など形式的な環境の記述でなければならない。ここまでの考察を見てみると、終助詞「ね」が付いた場合の「のだ」の機能は、阪田・倉持(1984)の指摘する①の機能に特化されるようである。つまり親文とも子文ともなりうる「のだ」文であるが、終助詞「ね」がつくことにより、子文として機能しているということを明らかにしているのである。

これまで、文レベルでは、文副詞との共起や文末モダリティ制限などの形式的記述がかなり進んできているが、談話レベルでは、いまだ意味的記述、主観的記述が多いように思う。談話レベルの場合、多くの要素が絡み合い、絶対的な共起制限を明らかにすることは難しいが、多くの実例から傾向だけでも明らかにする必要がある。

なお、先行研究で指摘されている「～んですよ」による押し付けがましさもこの談話構造の形式的な違いから説明できる。つまり、一般的に話題の中心部で主張部分で使用される傾向がある「～んですよ」を多用することにより、押し付けがましさが生じると考えられる。逆に本来主張すべき部分であっても「～んですね」を用いることにより話の前提あるいは補足情報として述べているに過ぎないと振舞うことで婉曲的に用いることも可能である。

#### 4.2 ターン保持ストラテジーの機能

次に、この「～んですね」文が実際の聞き手との関係において談話の中でどのようなはたらきをしているかについて考える。表1、表2で見たように、「～んですね」文には、多くの場合、直後に「それで」「で」「だから」などで結ばれる主張部分が存在し、話者交替は起こっていない。

これを聞き手の側から考えると、話し手が「～んですね」文を発した場合、そのあとに文が続くことが予想され、ターンを取りにくくなる。つまり、「～んですね」を使用するということは、話し手が自分のターンを保持するためのストラテジ的な役割を果たしているとも言えよう。

(13) A: あの一、今、大学生活、の一面を伺ったんですけども、アルバイトなんかはどうですか？

B: アルバイト、しないんですよ僕は。

A: ああ、しないんですか、ああ一、そうですか一、うん。

(母語話者コーパス)

(13) は「～んですよ」で発話された例であるが、これが「～んですね」であれば、その直後に、「なぜかというと、」のような理由を表す文が続くのが自然で、Bはその後に文が続くことを予想し、ターンを取りにくくなる。「～んですね」文を用いる談話では、話し手の頭の中には既に話す内容がまとまった形で準備されているのである。

また、最初に「～んですね」といった直後に、「～んですよ」とわざわざ言い直している例もある。次の(14)はアルバイトで交通費を支給してもらうよう交渉するというロールプレイでの会話である。

(14) A: (前略) まあ時給一でこのくらいお払いするということで、まあ我慢していただきたいなあ、と思ひまして。(B: ああ一、なるほど) うん。

B: そうですねえ。私あの実は、880円電車だけかかって、あのICUと往復するのに、(A: うん、うん) それで、あの一、自転車に、乗らないとなると雨の日など、(A: ああ) そすと余計にまた880円かかってしまうんですね。の、うふふ、かかってしまうんですよ。(A: うん) うーんですねえ。

A: ああ一そうですか (後略)

(母語話者コーパス)

ここでBは最初、「880円かかってしまうんですね」と言い、そのあと、「かかってしまうんですよ」と言い直している。明らかに「ね」と「よ」の違いを意識した発話のように感じられる。伊豆原(1993)の指摘にもあるように、「んですよ」はおしつけがましさが強く感じられる。そのため、(14)のような上下関係のある交渉場面では、

自分の意見を主張しつつも、それが押し付けがましく感じられないようにする必要があり、「んですね」が用いられたのであろう。しかし、「んですね」文は先に述べたようにその後に主となる文が続くことが多い。ここでも、本来ならば「880 円かかってしまう。だから、給料をあげてほしい」といった主となる文が続くことが予想されるが、「給料をあげてほしい」とあからさまに言うことははばかれる。よって、「880 円かかってしまう」ということを「んですね」を用いた主張部分として完結させているのだらう。

このように、談話レベルで「んですね」を見ることによって、日本語教育の場にも多くの貢献が可能であるように思われる。「話す」能力を考えた場合、自分のターンを保持しながら、主張を述べるという技術はレベルが上がるにつれて重要な要素となってくる。また、「聞く」能力から考えた場合も、「んですね」のあとに、より重要な主張部分が来ることを知っておくことも大切であらう。

なお、浜田 (1995) では、添加の「それで (で)」は、聞き手との間に「情報の授受が行われる文脈」で使用されると説明している。本稿では「んですね。それで、～」は、準備された計画性のある発話であり、ターン保持の機能があると述べてきた。これは一見矛盾するよう感じられるが、終助詞「ね」を用いていることなどからもわかるように、聞き手に配慮しつつ、かつ、発話権をコントロールしているものであろうと考えられる。また、浜田 (1995) では「それで」に対して、「そして」は「聞き手との情報の授受が話し手によって意図されていない文脈で用いられる」と説明している。表1をみると「んですね。そして～」というパターンはみられない。このことから、「んですね」文は、ただ単に自分のターンを保持するというだけでなく、聞き手に配慮しながらターンをコントロールしている表現だと考えることができる。レポーターの発話などに多用される所以であらう。

## 5. 日本語学習者の使用

最後に、日本語学習者の使用する「んですね」について簡単に触れておく。最初に述べたように、この「んですね」文は日本語学習者にとっては習得が難しく「のだ」「ね」の両方が使いこなせることに加え、第4節で見たような複合形式としての「んですね」の意味機能、適切な使用場面がわかっていなければならない。以下に挙げ

る例文は、日本語学習者の OPI データである KY コーパス<sup>5</sup>に現れたものである。

(15) 〈女性の就職について〉

T : ああそうですか、中国では考えられないというのはどうしてなのでしょう  
ようか

S : ええと、昔の女性は、あの、学問を得てはいけないんですね、〈T : はあ、なるほど〉で、ですから、女性は全く、あの、全盲 〈T : ええええ〉と申しますか、あの、できれば、〈T : ええ〉それは家庭だけのことに尽くせれば、〈T : うん〉一番素晴らしい人生であると、〈T : はあ〉昔から評価されていますので、〈T : あーそうですか〉はい

(KY コーパス中国語母語話者－超級)

(16) T : はい、じゃ、その中のそのさっきの、学生、日本人の学生を見て、うらやましいとか、こうしなければいけないと思ったっていうようなこと

S : 一番、うれしいなことは、やっぱり 4 年生に入ったら、あの、研究室に入って、専門的に、研究ができるんですね、研究室へ、そして、んー、マスター課程の人たちと、なにか、ドクターコースの、この人たちに、ちゃんと教えてくれること、これが一番うらやましいなー、と思いました

(KY コーパス韓国語母語話者－上級)

(15) (16) のように、うまく使えば非常に日本語らしく聞こえる。これは、4.1 で見たように、「～んですね」が [前提] → [主張] といった談話構造をしていることから、論理的に説明ができていることを印象付けることができるからと考えられる。特に上級以上の学習者になってくると、実際の談話の中でお互いのターンを譲ったり保持したりしながら、まとまった談話として話す能力が要求される。本稿で扱った「～んですね」も「説明」「描写」「叙述」のようなまとまった談話を話すときに必要なストラテジーの一つとして指導する必要があるかもしれない。

また、「のだ」の誤用として代表的な「～んですから」の誤用も、この「～んですね」と関連付けて考えることができる。

(17) T : あーじゃあの一、じゃーね、あの一土曜日とか日曜日、休みの日はいつも何をしてるんですか、時間ある時

S : あの一こちらで

<sup>5</sup> KY コーパスとは、平成 8～10 年度文部省科学研究費補助金基盤研究「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」(研究代表者：カッケンブッシュ寛子)で作成された OPI の文字化資料。

T : はいはいはい、やっ中国でもいいです、どちらでもいいです

S : 土曜日今はもう、あのーうちは、家庭もってるんですから、〈T : うん〉  
土曜日は1つは仕事をやめて休むことと、もう1つは、あのー、家庭の  
いろんな、あのー、掃除をするとか、あのーそうじですね、買い物に行  
くとか、〈T : はい〉 えーあるいは、子供を連れて遊びに行くとか、そ  
ういうのがありまして (KY コーパス中国語母語話者一上級(上))

(18) T : えー、じゃあ、あのー、ツーリスト関係の仕事って、こうなさってた時  
のですね、一日を、どんな生活をしてらしたのか、朝から夜までの一  
日を、ちょっと、簡単におっしゃって頂けますか

S : えー、はい、中国はー、日本のような、生活リズムは、速くはないんで  
すから、んー朝、起きて、のんびりしてもいいんです、〈T : ええ〉食  
事して、ちよとオフィスを、んーあのー新聞とか、えー雑誌をちよと  
読んで、〈T : はい〉 んー、午後はたぶん、あのー観光客、がですね、  
〈T : はい〉 はい、空港、にでて、観光客、迎えに行く、〈T : はい〉  
という形ですが、〈T : ええ〉 ゆう、ご、夕飯はほとんど、ホテルで、  
とります、〈T : ええ〉 えーこういう形なんです

(KY コーパス中国語母語話者一上級(上))

野田春美 (1995)、桑原 (2003) で指摘されているように、「～んですから」は単に「のだ」と「から」が複文として結ばれているだけでなく、「相手が前件の事態を知ってはいらざるが、後件の判断に至るほど十分には認識していないとみなし、十分認識させるために前件の事態を改めて示す。(野田春美 1995)」といった特殊な意味が生じる。これまでは、「のだ」の有無といった観点から論じられることが多かったが、「～んですね。だから」といった連文の場合も考慮に入れる必要がある。

一般にレベルが上がるに従って、単語から文、文から複文へと複雑な文を作ることが要求される。しかし、一方で上級以上の学習者の用例を見てみると、複数の従属節が不自然に長く連なっているものも多く、節どうしの関係が不明瞭になっているものも多い。また、(17) (18) のように特殊な意味が出ることにより、誤用となる場合もある。「のだから」のように、常に特異性が生じる場合に限らず、聞き手に与える効果や、また説得などの機能を有する場合、ただ複文として文をつなぐだけでなく、複文にできるところでも分けて単文を並べたほうが良い場合もある。

今後、母語話者の談話構造をより細かく分析することによって、文をつなぐルール、分けるルールを明らかにする必要がある。

## 6. おわりに

本稿では、話し手しか知らない情報を述べる際に用いられる「～んですね」について談話レベルでの形式的記述を行った。先行研究では、置き換え可能な「～ですよ」との比較において「気持ちの一体化、共有化」「聞き手への持ちかけ」といった用語を用いて説明が試みられているが、本稿では日本語教育を視野に入れ、意味的説明よりも形式的説明が必要であると考え、実例をもとに実際の談話構造の中でどのような特徴を持っているか、形式的な面から記述を行った。

「～んですね」は、直後に「で」「それで」「だから」などの接続詞を伴った文が続く場合が多く、「～んですね」文が後続文の原因・理由、補足情報などの「前提」を表し、後続文がその発話の中での「本題」「主張」を表すといった談話構造をしている。一方、「～ですよ」文は後ろに文が続かない場合も多く、それ自身が「主張」となっているものが多い。このことから先行研究で指摘されているような「～ですよ」による「押し付けがましさ」も説明できる。また、「～んですね」は、発話の際にある程度まとまった談話がすでに頭の中に準備されており、このことから対話の中で自分のターンを保持するという談話ストラテジーとしての機能も有している。

このように「～んですね」は、自分のターンを保持しながら、かつ、[前提] → [主張] といった論理的な説明ができていていることを示すことができる。以上のことから、日本語学習者、とくに高度な説明やまとまった談話を要求される上級以上の学習者に対して指導する必要がある項目であると考えられる。

今回は「～んですね」を一つの形式として分析すべきかどうか、さらに日本語教育の中で指導すべきかどうかには主眼を置き、現状を概観するにとどまった。今後は、「のだ」、「ね」、「よ」、接続詞のそれぞれの先行研究を十分に検討し、その本質的意味をふまえたうえで改めて分析したい。今後の課題としたい。

### 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（著）、白川博之（監）（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク。
- 伊豆原英子（1993）「「ね」と「よ」再考 — 「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80、pp. 103-114.
- 伊豆原英子（1997）「独話文における「のだ」の現れとその機能—独話教育のための基礎的研究（1）—」『日本語・日本文化論集』5、pp. 49-68、名古屋大学留学生センター

- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版.
- 菊地康人 (2000) 「「のだ (んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』 10, pp. 25-51
- 金水敏 (1993) 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』 22-4, pp. 118-121、大修館書店.
- 桑原文代 (2003) 「説得の「のだから」—「から」と比較して—」『日本語教育』 117, pp. 63-72.
- 陳常好 (1987) 「終助詞 —話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』 6-10, pp. 93-109、明治書院.
- 阪田雪子・倉持保男 (1980) 「教師用日本語教育ハンドブック④ 文法II 助動詞を中心にして」、国際交流基金.
- 野田春美 (1995) 「「のだから」の特異性」『複文の研究 (下)』 (仁田義雄編)、pp. 221-245、くろしお出版.
- 野田春美 (2002) 「第 8 章 終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃編『モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」『日本語の文法 4 複文と談話』、pp. 3-62、岩波書店.
- 野田尚史 (2003) 「接続と談話・テキスト」夏季特別研究会ハンドアウト (2003 年 9 月 1 日、於 京都教育大学).
- 浜田麻里 (1995) 「いわゆる添加の接続語について」『複文の研究 (下)』 (仁田義雄編)、pp. 439-461、くろしお出版.
- 松木正恵 (1993) 「「の」と終助詞の複合形をめぐって」『日本語学』 12-11, pp. 51-64、明治書院.
- 森山卓郎 (2001) 「終助詞「ね」のイントネーション —修正イントネーション制約の試み—」『文法と音声Ⅲ』 (音声文法研究会編)、pp. 31-54、くろしお出版.

## 附 記

本稿は、第 71 回関東日本語談話会 (2003 年 11 月 1 日、於 学習院女子大学) における口頭発表を加筆・修正したものである。席上、有益なコメントを下された先生方に感謝申し上げます。また、本稿執筆に際し、多くの方から貴重な御意見、御指摘をいただきました。重ねて感謝申し上げます。

(はしもと なおゆき・東京都立大学大学院生)